



③ 二首の和歌に共通する《掛詞》を説明せよ。

【参考】『蜻蛉日記』上巻・天曆九年（九五五）十月

これより夕さりつかた、「うちにのがるまじかりけり」とて出づるに、心えで、人をつけて見すれば、「町の小路なるそこそこになむ止まりたまひぬる」とて来たり。

さればよと、いみじう心うしと思へども、いはむやうも知らであるほどに、二三日ばかりありて、曉方に、門をたたく時あり。さなめりと思ふに、憂くてあけさせねば、例の家とおぼしき所にもものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

嘆きつつひとり寝る夜の明くるまはいかに久しきものとかは知る  
と、例よりはひきつくろひて書きて、うつろひたる菊にさしたり。

かへりごと、「開くるまでも試みむとしつれど」とみなる召し使ひの来あひたりつればなむ。いとことわりなりつるは。

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるはわびしかりけり」  
さてもいとあやしかりつるほどに、ことなしびたる。

〔注〕○天曆九年——兼家二十七歳・道綱母二十歳くらい・道綱一歳。○うちにのがるまじかりけり——兼家の言葉。「内裏に避けられない用事があるのだった」。○町の小路——京の南北の通りの一つ。現在の新町通りにあたる。○さればよ——やっぱり思つた通りだ。○なほもあらじ——そのままにはしておくまい。○例よりはひきつくろひて——いつもよりは改まって。○うつろひたる菊——霜にあたつて花の色が変わつた菊。○ことなしびたり——何事もなかつたかのように振る舞っている。

【文学史】 女流日記

＝女性の手になる（『ひらがなで書かれた』、自身の体験によるノンフィクション）。

- ・土佐日記 ……作者は男性（紀貫之）。最初の仮名日記。紀行文。一〇世紀前半に成立。
- ・蜻蛉日記 ……作者は藤原兼家（道長の父）の妾（側妻）。一〇世紀後半。
- ・和泉小娘日記 ……作者と親王たちとの恋を描いた歌物語的作品。一一世紀初め。
- ・紫式部日記 ……作者は道長の娘に仕えた女房。記録＋随筆的。一一世紀初め。
- ・夏宮日記 ……作者は受領の娘。『源氏物語』耽読の段が有名。一一世紀中頃。
- ・源氏物語日記 ……作者は堀河天皇に仕えた女房。亡き天皇を追憶する。一二世紀初め。
- ・十六夜日記 ……作者は阿仏尼。所領をめぐる訴訟のため鎌倉に下る。一三世紀末。
- ・とほすけ日記 ……作者は後深草院二条。院や男たちの欲に翻弄される。一四世紀初め。

【文法基礎線】 希望・比況の助動詞

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
まほし	まほし <sup>く</sup>	まほしく	まほし	まほしく	まほし <sup>け</sup>	まほし <sup>め</sup>	シク活用
たし	たし <sup>く</sup>	たしく	たし	たしく	たし <sup>け</sup>	たし <sup>め</sup>	ク活用
ごとし	ごとし <sup>く</sup>	ごとしく	ごとし	ごとしく	ごとし <sup>け</sup>	ごとし <sup>め</sup>	シク活用
(下接語)	―はず	―けり	―。	―とき	―ども	―	

意味 まほし・たし…… ①希望(「〜たい」)

ごとし…… ①比況(「〜に例えよう」) ②例(「〜に例えよう」)

接続 まほし……活用語の「未然」形

たし……活用語の「連用」形

ごとし……体言・活用語の「連体」形・助詞「の・ば」

\*「ごとし」は語幹「ごと」だけでも使われる。また、形容詞型の「ごとくなり」「やうなり」も「ごとし」と同様に使われる。

↓複雑な活用は→で…。

【現代語訳】

「(兼家の)ご次男は、陸奥守藤原倫盛殿の娘の所生でいらっしゃる方である。道綱と申し上げて、大納言にまでなつて、右大将を兼ねなされた。この(道綱の)母君は、この上ない和歌の達人でいらっしゃったので、この殿(兼家)がお通いになつてゐた頃の出来事、和歌などを書き集めて、『蜻蛉の日記』と名付けて世に広めなされた。(あるとき)殿がいらっしゃったときに、(道綱母は)門をなかなか開けなかつたので、(兼家は)何度も何度も案内を頼みなされたが、女君は(こう歌を詠んできた)、

嘆きながらひとりで寝る夜が『明ける』までの時間はどれほど久しいものか、あなたは知っていますか(知らないでしょう? 門を『開ける』のも待てないあなたは)

(兼家は)とても面白いとお思ひになつて、

本当に本当に、冬の夜ならぬ横の戸も、夜がなかなか『明け』ないように、戸をなかなか『開け』てくれないのは苦しいものだったんだなあ

(とお返しになつた。)

府より真弓横弓年を経て  
わがせしむるごとく(通)うけしめせよ

### 【参考の訳】

この後の夕暮れごろ、(兼家が)「宮中で避けられない用事があるのだった」などといって出ていくので、胸に落ちず、人に後をつけて見に行かせると、「町の小路にあるそこそこに(兼家の車が)お止まりになりました」と言いつて帰ってきた。

やつぱり思ったとおりだと、ひどく不愉快だと思うけれど、どう言つてやつたらいいのかもわからないでいるうちに、二三日ほどして、明け方ごろに、門をたたくことがあつた。そう(兼家の訪れ)であるようだとは思ふが、不快で開けさせなかつたところ、例の家と思われる所へ行つた。翌朝、そのままほうっておくわけにもいかないと思つて、

嘆きながらひとりで寝る夜が『明ける』までの時間はどれほど久しいものか、あなたは知っていますか(知らないでしょう? 門を『開ける』のも待てないあなたは)と、いつもよりは改まった字で書いて、紫に変色した菊にさして送つた。

(兼家の)返事。「(あなたが門を)開けてくれるまで試してみようとしたのだけれど、急用を知らせるお召しの使いがたまたま来てしまったので(そちらへ行つたのだ)。(あなたが怒るのも)とてももつともなことだね。

本当に本当に、冬の夜ならぬ横の戸も、夜がなかなか『明け』ないように、戸をなかなか『開け』てくれないのはつらいものだったんだねえ」

それにしても、(兼家は)とても不思議なくらい、何事もなかつたようにしている。

☆『大鏡』『蜻蛉日記』でのこのエピソードには、どのような違いがあるか?

【さらに参考】工藤重矩『源氏物語の結婚』(中公新書・二〇二二年)

(正妻腹の子(嫡子)とそれ以外の女性との子(庶子)とでは、扱いの違いがあつた)

兼家の男子、すなわち道長の兄弟の場合は、正妻時姫所生の道隆(九五三年生)、道兼(九六一年生)、道長(九六六年生)はいずれも十五歳で従五位下(道隆は中宮御給、他の二人は冷泉院御給)を叙されている。藤原倫寧の娘所生の道綱(九五五年生)も従五位下(冷泉院御給)である。道綱は叙位年齢が十六歳で、時姫所生の男子に比べれば一年遅れているが、スタートに嫡庶の差はほとんどない。ただし、次の従五位上に昇るまでに要した年数が、道隆は六年、道兼は八年、道長は六年であるのに対して、道綱は十一年を要している。このあたりに差が出ているといつてよいかもしれない。(41、42頁)

